

24-10 片倉城跡（八王子市片倉町）

地図15

沿革・伝承 『風土記稿』多磨郡之十五・柚木領片倉村の条では「古蹟・片倉城蹟」として、応永の頃に大江備中守師親が在城したこと、かつて城址から応永・永徳等の年号を刻んだ古碑（板碑か）が出土したこと、城の西方台地続きが大手で小高い平坦地に侍の屋敷町があったこと、等の所伝を記している。また城跡にある住吉社は片倉村の鎮守であるが、もとは大江氏の守護神であったと伝えている。『風土記稿』所載の「片倉村総図」には城跡の様子が描かれているが、地形の捉え方が巧みで遺構も現存するものとよく一致する。ただし、築城主体や年代に係る地誌の所伝については検証を必要とする。

城郭研究者の間ではすぐれた縄張を有する城として評価が高く、伊禮正雄氏らを中心に早くから後北条氏の築城である可能性が指摘されている。遺構・考察 片倉城は小比企丘陵支脈の東端にあって、北は湯殿川、南は兵衛川（宇津貫川）に挟まれている。台地が続く西方を除く三方は、かつては沼沢地であった。城地の東麓を通過する国道16号線は古川越道とよばれ、北は八王子市街を抜けて川越方面へ達し、南は御殿峠（杉山峠）を越えて相模へ通ずる。また、開発により現在では道筋が変化してしまったが、以前は城地の南で古川越道と分岐して鍾水方面へ向かう道を鎌倉街道とよんでいた。永禄12年（1569）に侵攻した武田軍、天正18年（1590）の前田・上杉軍とも古川越道を通ったとされており、片倉城は相武間の交通の要衝に位置している。

城跡の中心部は現在公園となっており、一部は住吉神社の社地や私有地である。主要な遺構は残っているが、耕作や公園化に伴う土塁の取り崩しと堀の埋め立てなどがあり、細部を把握できない箇所がある。なお、第2次大戦中に軍の防空部隊が駐屯したが、置かれたのが対空聴音器だったため、大戦時の大規模な塁壕の改変は少ない模様である。

遺構は東西二つの曲輪1・2を中心に現存するが、台地先端に位置する東側の曲輪が主郭である。1・2間および2の西側は幅広の堀で遮断す

るが、両曲輪とも堀切に面して土塁を築き、土塁北端を張り出して櫓台としている。曲輪2から北方に突出する尾根支脈も、基部を堀で遮断する。主郭北直下の住吉社の建つところは現状では腰曲輪にみえるが、西側部分では縁に土塁が残っている。聞取りによれば、戦前に社殿が傾いて建替える際、地盤が軟弱であることが判明したとのことである。この腰曲輪部分は、本来は横堀だったと考えてよいであろう。曲輪1・2とも、横堀が全周していた可能性が高い。

虎口については現況では不明な部分が多い。もっとも明瞭なのは曲輪2南面の虎口で、両側に横矢の張り出しを伴い、土橋を渡った対岸は原初的な角馬出となっている。主郭南側の張り出し部分も虎口の可能性が考えられるが、この場合は横堀対岸の土塁上から木橋で出入りすることになる。曲輪1・2間の現在橋が架かっている箇所および2の西面は、現状で見る限り土塁で塞がっており積極的に虎口と認められる確証はない。ただし、『風土記稿』所載図はこの部分の土塁が切れているように描かれている。両郭とも土塁は後世の変形が著しく、この地点に虎口が存在したかどうかは現状からは断定できない。

この城の遺構で注目されるものとして、曲輪2の南西外側に存在する、周囲を堀で囲まれた櫓台状の遺構がある。この箇所は、先述の馬出から西方の台地に通ずるルートを押さえる位置にあり、独立した戦闘が可能な一種の堡塁と考えることができる。

この他、斜面の数箇所に竪堀またはその可能性のある窪みが認められる。また主郭北麓には土塁状の地形があって、台地下からの侵入を阻止する土塁または横堀が存在していた可能性も指摘できる。西方の台地上は基本的には自然地形であるが、南北に貫通している農道の北端部分が掘り窪められており、外郭線が存在する可能性もあるが、発掘調査等による確認が必要である。

全体としてみると、曲輪の配置は舌状台地を区切る直線連郭式であるが、導入系の技法は横矢掛りや馬出を駆使した高度なものである。現段階で

は、築城主体や年代を特定する材料が不足しているが、地誌が伝える応永年間の国人層による築城

とは考えにくい。後北条氏の築城と見る意見の妥当性を含め、今後とも検討が必要である。



第27図 片倉城跡縄張図 (S=1/2500)